『レーニンの言葉』

栗木伸一編著

1969年芳賀書店刊

旧著「レーニンの言葉」が電子版として復刊されることになって　・・・3

第一部　芸術・文化について

1　芸術論　・・・4

階級社会と芸術家／いわゆるモダン芸術について／芸術は人民に属するもの／音楽にはたえられない

2　文学について　・・・6

「自由な文学」はありうるか／「自由な出版」とはなにか／「党的文学」と文学の自由の問題／プロレタリア文化について／革命後のロシアは「官僚文化」なしですませれば十分である／小説について

3　文学者の評価、知識人の役割について　・・・12

政治と芸術／ゴーリキーへの批難／トルストイの評価／インテリゲンチャの役割

第二部　性、婦人、青年、教育、道徳について

4　性と恋愛　・・・16

「性的なことをあさりまわる風潮」／水一杯の理論／「自由恋愛」について／純粋なキスと不純なキス

5　婦人問題について　・・・19

婦人の隷属と差別と虐待／婦人の解放の条件について／社会主義と婦人の解放／離婚の自由について／労働者と産児制限運動の価値／婦人問題と社会問題

6　青年及び教育について　・・・22

青年の任務は何か／若者に必要なもの／何を学ぶべきか／どのように学ぶべきか／古い学校について

第三部　哲学と世界観

7　唯物論の哲学　・・・27

マルクス主義は唯物論である／唯物論と観念論をわかつもの／反映論／物質の哲学的概念／宗教の根源について／観念論の認識論的根源

8　弁証法について　・・・32

弁証法の核心／発展の学説としての弁証法／認識の弁証法／弁証法における否定／弁証法と詭弁および折衷主義

9　ヘーゲルの「論理学」について　・・・36

論理学の「三つの項」／ヘーゲルの「論理学」の意義／「論理学と「資本論」／プレハーノフ批判／論理学の諸カテゴリーと人間の実践

10　唯物史観　・・・40

唯物史観の意義／社会の発展は自然史的過程である／決定論について／「客観主義者」（宿命論者）について／「人類最高の課題」はなにか

第四部　経済理論について

11　ナロードニキ批判と資本主義の「進歩性」　・・・45

「人民的生産」の小ブルジョア的性格／資本主義の矛盾と市場問題／資本主義の矛盾と進歩性／資本主義と機械／トラストや独占資本とどう闘うか／「自由貿易（いわゆる「自由化」）の擁護／ナロードニキの本質

12 農民問題と農業革命 ・・・52
農民の二面性／農民に対するプロレタリアートの態度／「切取地綱領」／ロシア農民革命の展望／ブルジョア的発展の二つの道／二段階革命論
13 帝国主義について ・・・58
帝国主義の定義／帝国主義の五つの指標／帝国主義と資本主義一般との関係／帝国主義と日和見主義との結びつき／カウツキー主義批判／帝国主義と中立国
14 「独特な国家資本主義」とはなにか――いわゆる「ソ連論」へのいとぐち ・・・64
何のためにソヴィエトは権力を握るのか／ネップ＝「独特な国家資本主義」について／ネップの矛盾／ロシアの官僚主義の経済的根源／社会主義と階級

第五部 国家・民族・戦争の理論
15 国家の理論 ・・・71
国家の本質はなにか／民主主義国家に対する批判／ブルジョア国家とプロレタリア国家／プロレタリア民主主義について／「民主連合政権」への批判／「自由な人民国家」批判／中央権力と地方自治
16 民族問題について ・・・76
マルクス主義と民族主義／小市民的民族主義者の議論／「民族文化」について／世界的な階級勢力の配置／帝国主義と民族解放闘争／民族闘争におけるプロレタリア党の自立性
17 帝国主義戦争と日和見主義 ・・・83
戦争は政治の継続である／帝国主義戦争と日和見主義／「祖国擁護」について／平和主義について／軍備撤廃について

第六部 階級闘争とプロレタリアートの前衛党
18 階級闘争の理論について ・・・89
革命的情勢なくして革命なし／階級闘争とは何か／改良闘争と革命闘争／民主主義のための闘いと社会主義のための闘い／「統一」について／「統一戦線」批判／小ブルジョア革命主義批判
19 党と共産主義的活動 ・・・95
党の構成の「ひろさ」／経済主義について／いわゆる「外部注入論」／革命理論の重要性／革命家の理想像／労働者の組織と革命家の組織／党と政治新聞／共産主義的活動について

第七部 レーニンの伝記 ・・・104
兄アレクサンドロフの処刑／ロシアの二つのプロレタリア党／ロシアの革命戦略についての見とおしと現実／帝国主義戦争と「流れに抗して」／ロシア革命の勝利とレーニン／革命勝利後のレーニン的政策の意義／レーニンの人間像

編者のあとがき ・・・119

旧著「レーニンの言葉」が電子版として復刊されることになって

私の旧著、「レーニンの言葉」は一九七〇年頃、芳賀書店から出版されものであるが、今は全く絶版になっており、古本屋にときどき現われるにすぎない。今回、それがネット上に掲載されることになり、こうした形であれ、多くの希望者の手に入り得ることになったのはうれしいことである。

「レーニンの言葉」は、小山弘健が中心になって編集した、「誰々の言葉」シリーズの一環として計画され、発行されたものであり、小山を通して、レーニンの部分が私に廻って来たのであった。なぜ私に来たかは、小山からは聞いてはいないが、彼としては、共産党以外の左翼ということで探していて、私のことを誰かから聞いたのであろうか。

シリーズの他の本としては、「毛沢東の言葉」といったものが出されたようであったが、それ以外にも出たのかどうかは定かではない。

とにかく私はいわゆる“公式的な”見解を排して、例えば、「国家資本主義」の問題に一つの章をあて、レーニンの新経済政策つまりネップの政策の評価と関連して、ソ連国家（スターリン主義）についても、できるだけ批判的な内容を盛り込むといったこともしてみた。

小山は私の原稿を大体は承認したが、新左翼の急進派を暴露した個所などに若干のクレームをつけ、その部分は大幅に縮小するといったこともあった。

今では、レーニンとレーニン主義を持ち上げる党派や人々は少なくなっている。ソ連邦は解体し、スターリンの「国家資本主義」はその本性を暴露して、ますます“自由”資本主義に傾き、その頽廃ぶりをさらけ出している。共産党の不破らは、最近、ますますレーニン批判をこととするようになり、それは一種の流行にさえなっている。ソ連邦が解体し、ソ連的な“社会主義”（スターリン主義）への幻想がなくなり、それと関連して、レーニンの事業までもが疑われるようになったということだけでなく、日和見主義からブルジョア的立場に移行した不破は、レーニンの思想や実践の革命的な本質に反発したというのが、本当のところであろう。

実際、ソ連邦や中国のブルジョア的現実と、レーニンの革命的実践やそのイデオロギーは何の関係もない。レーニンは確かにネップ（資本主義の容認政策）を「導入」したが、それは、スターリンやフルシチョフらと違って、それが「社会主義である」とか、「それを通して社会主義に移行する」とか信じたからではなく、そのブルジョア的本性をよく自覚していたが、そうすることなくしては、ソ連の革命的権力が持ちこたえることができないことを知ったからであり、緊急避難として、その政策を採用したにすぎないからである。

だから、レーニンはネップ（つまり資本主義の容認政策だ！）のロシアから、うまく行けば、あるいは西欧のドイツやイギリス等々で労働者階級が迅速に勝利するなら、社会主義が生まれるかもしれないが、しかし資本主義に移行する必然性さえあることを常に強調しているのであって、ネップの“危険性”を誰よりもよく自覚していたのである。

レーニンのような実践的な革命家はとりわけ、彼が活動し、生きた時代との関連の中で評価しなてくはならないのであって、その意味では、無条件的な絶対化ほど有害なものはない。しかしその上でなお、レーニンの活動と理論から、世界の労働者階級が今なお学び得ること、学ばなくてはならないことがどんなにたくさんあるかを確認しなくてはならない。そしてそうなったとき、私のこの本もまた、その一助となることを期待する。

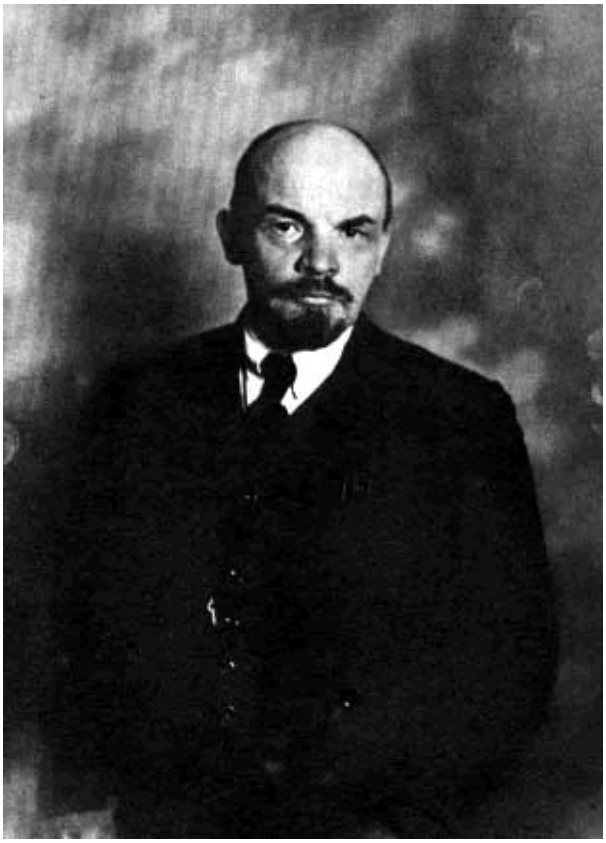
2007年5月23日　著者記す

第一部　芸術文化について

1 芸術論

●階級社会と芸術家

「われわれの絵画、彫刻、建築の発展におよぼした宮廷のモード、気紛れは、貴族、ブルジョアの趣味と気紛れと同じだ。私有財産に基礎をおく社会では、芸術家は市場向けの商品を生産する。彼らには購買者が必要なのだ。われわれの革命は、この極めて散文的な条件から芸術家を解放した」（クララ・ツェトキンとの会話、一九二〇年）



レーニン（モスクワ1920年）

マルクス主義者としてのレーニンは、芸術を社会経済体制の「上部構造」として、すなわち歴史的なその体制が生み出したもの、反映という面からとらえている。この観点に立てば、すべての芸術や文化は、それが生み出された歴史的な社会と切りはなすことができない。従って、階級社会の芸術は「貴族、ブルジョアの趣味と気紛れと同じ」ということになる。私有財産に基礎をおく現代の資本主義社会では、芸術も「商品化」されざるをえないのだから、それ特有のゆがみや卑俗化をこうむる。芸術家は結局、市場の一般的条件に従属する。芸術という商品の「需要」は金持ちやブルジョアであるのだから、芸術がこうした人々の好みや心理や趣味を反映しないわけにはいかない。レーニンは、このように芸術をいやしめる階級社会を非難し、ロシア革命が芸術家のおち入ったこれらの「散文的な条件」から彼らを解放したとよろこんでいるのである。しかしもちろん、ロシアの革命後の社会的展開は、芸術家を真に解放し、誰にも依存せず、自分の理想に従って自由に創造するという状態をもたらしはしなかったが、それはまた別の問題である。

●いわゆるモダン芸術について

「美しいものは保存し、それを手本とし、それが仮に『古い』としても、そこから出発するのだ。何故にわれわれは、ただそれが『古い』というだけで、真に美しい